

新城高等女学校



70年前の悲劇

愛知県立新城高等学校 学淵祭 企画

2015年11月6日（金）

1 第二次世界大戦末期における新城高校

1937年 7月 廬溝橋事件、日中戦争始まる

1939年12月 豊川海軍工廠開庁

1941年12月 米英へ宣戦布告、太平洋戦争に突入

1943年11月 学徒出陣、学生（大学・高等専門学校）の徴兵猶予廃止

新城農蚕学校在校生へも志願兵の勧誘が強まり、57名が志願

1944年 1月 「緊急国民勤労働員方策要綱」・「緊急学徒勤労働員方策要綱」閣議決定 国民学校高等科（現中学1年～2年）旧制中学（現中学1年～高校1年）高等女学校（現中学1年～高校1年）等の動員が強化される

1944年 4月 愛知県、県下の学校に学徒動員を要請

新城高等女学校1・2年生は、学校（現新城中学校、海軍工廠の疎開工場）で弾薬製造。3年生は名古屋の中島飛行機製作所、4年生（108名）は豊川海軍工廠へ動員される。正式には「勤労学徒報国隊」と称される。

前年度（1944年3月）卒業生も「女子挺身隊」として豊川海軍工廠へ行く。また、それ以前の卒業生も卒業と同時に工廠へ行った者がいる。

新城農蚕学校では、学校や地域で農産物の増産に挺身。また、大同製鋼、住友工業、中島飛行機製作所などへ勤労働員させられた。一方、学校はほとんど空となり、運動場は芋畑と化し、校舎は陸軍「颯」部隊の師団司令部となった。

鳳来寺家政高等女学校4年生も豊川海軍工廠へ動員される。

8月 「学徒勤労令」「女子挺身隊勤労令」閣議決定。

1945年 3月 「決戦教育措置要綱」閣議決定

国民学校初等科（現小学1～6年）以外、授業停止

4月 前年度4年生は、全員専攻科へ進むこととされ、引き続いて海軍工廠で仕事を続ける。前年度3年生も同様に4年生になっても中島飛行機製作所で仕事を続ける。

5月 名古屋空襲、中島飛行機製作所壊滅。4年生は学校へ戻って兵器生産。

8月 7日 豊川海軍工廠への空襲

午前9時半頃より約1時間にわたり、3256発もの500ポンド爆弾（約240kg）が落とされ、工廠はほぼ壊滅。これにより2500人以上の命が奪われ、その数倍の人々が負傷。新城高女動員学徒22名が被災。

8月15日 ポツダム宣言受諾、天皇による戦争終結放送

9月 専攻科生徒たちは学校に戻り、授業再開。鳳来寺高等家政女学校出身の生徒のうち希望者は新城高等女学校専攻科へ入学。

1946年 3月 専攻科生徒卒業43名

1948年10月 愛知県新城高等女学校と愛知県新城農蚕学校が統合し、愛知県立新城高等学校となる。

2 豊川海軍工廠の空襲で被災した学徒たち

空襲による戦没者 2 5 4 4 名のうち動員学徒は 4 5 2 名（女子 2 5 9）とされる。

全従業員は約 6 万人、全動員学徒は約 6 千人。（文献⑨） 動員学徒の戦没率が高い！。

<大 学> 就学年齢 1 8 歳～（3 年間）

早稲田大学	1 5 名	日本大学	6 名
-------	-------	------	-----

明治大学	1 名		
------	-----	--	--

<専門学校> 就学年齢 1 6 歳～（3 年間）

立命館専門学校	4 名	摂南工業専門学校	4 名
---------	-----	----------	-----

<中学校> 就学年齢男子 1 2 歳～（4 年間）

愛知県豊橋中学校	3 7 名	愛知県豊橋第二中学校	2 5 名
（時習館高校）		（豊橋東高校）	

愛知県成章中学校	2 名	豊橋市立商業学校	7 名
（成章高校）		（豊橋商業高校）	

豊橋市立工業学校	4 2 名	豊川中学校	6 名
（豊橋工業高校）		（豊川高等学校）	

<女学校> 就学年齢女子 1 2 歳～（4 年間）

愛知県国府高等女学校	1 8 名	愛知県豊川高等女学校	1 0 名
（国府高校）		（国府高校）	

愛知県新城高等女学校	2 2 名	豊橋市立高等女学校	3 6 名
（新城高校）		（豊橋東高校）	

豊橋市立女子商業学校	3 0 名	豊橋高等家政女学校	2 4 名
（豊橋商業高校）		（藤ノ花女子高等学校）	

豊橋桜ヶ丘高等女学校	3 5 名	豊橋松操高等女学校	4 4 名
（桜ヶ丘高校）		なし	

愛知高等実修女学校	2 3 名	名古屋緑ヶ丘高等女学校	2 名
（豊橋中央高校）		（名古屋女子大学）	

静岡県気賀高等女学校	4 名	浜松誠心高等女学校	1 名
------------	-----	-----------	-----

<国民学校> 就学年齢 6 歳～（6 年間）、高等科は 1 2 歳～（2 年間）

豊川市牛久保国民学校	1 1 名	豊川市八南国民学校	2 名
------------	-------	-----------	-----

豊川市豊川国民学校	7 名	豊川市国府国民学校	1 8 名
-----------	-----	-----------	-------

宝飯郡小坂井東国民学校	3 名	宝飯郡一宮西部国民学校	3 名
-------------	-----	-------------	-----

宝飯郡前芝国民学校	1 0 名		
-----------	-------	--	--

計 4 5 2 名

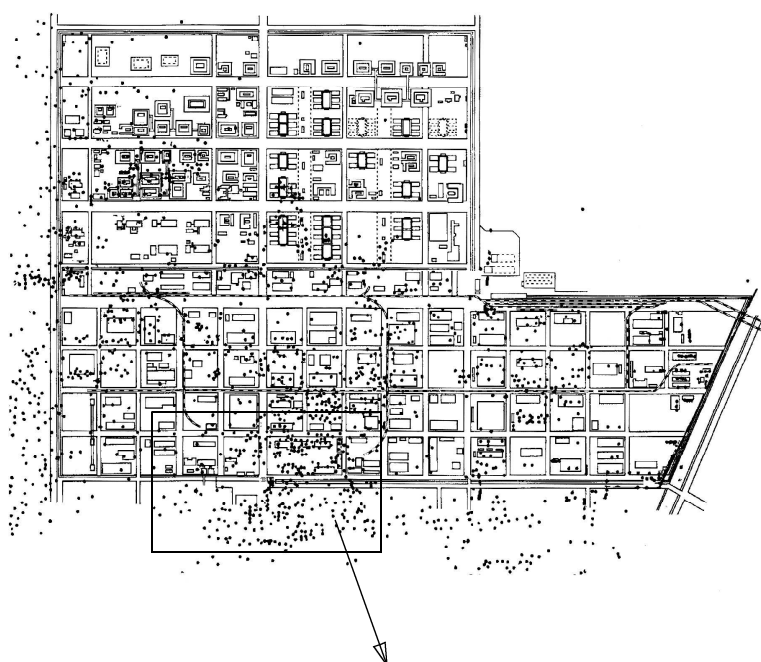
3 新城高等女学校 22人の悲劇

<新城高等女学校は何故被災率が高かったか？>

太平洋戦争の末期の1944年4月、新城高等女学校の4年生生徒108名が豊川海軍工廠に動員されました。自宅から通勤できる者は総務部、通えない者は寄宿舍に入って会計部の各係に、名簿順に数名ずつ配属され、兵器生産や事務、その他の雑務等の仕事に就きました。付き添い教員は浅見巖、鈴木とよ子の2名でした。

その後、病気や家庭の事情で退廠したり、国民学校の代用教員になった者、師範学校に進学した者など、様々な事情によって動員数は減っていき、空襲当日は92名（86名文献⑤、約70名という記述もある。）が在籍していたそうです。

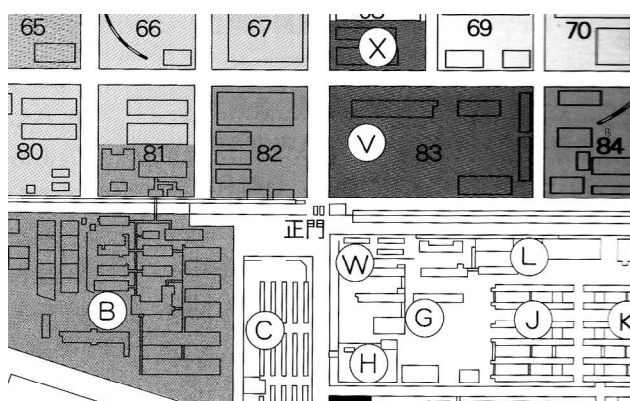
1945年8月7日朝、警戒警報に続いてすぐに空襲警報が発令され、まもなく最初の空襲がはじまりました。米軍資料によれば10時13分から26分間とされますが、体験記等には、9時半頃から約1時間という記述が各所に見受けられます。



<上；爆弾の着弾点、 下；正門付近を拡大>

124機のB29爆撃機が12の編隊（1編隊10機）に分かれて、約2分間隔で断続的に爆弾を投下しました。また、P51戦闘機による機銃攻撃も行われました。

最初の段階では正門（現日本車輛正門）付近を中心に爆弾が投下されました。3千余発の250キロ爆弾が工廠全体に落ちている記録(右上図)を見ると、被災者もある程度各部署均等にいるよう



B：共済病院 83：総務部 82, 84：会計部

（参考文献⑨より複写加工）

に思われますが、最初の爆撃を受けた正門付近が最も悲惨な状況だったようです。逃げる猶予がなかっただけでなく、正門を通過して工場外へ逃げる人たちが集中しているところへ爆弾が投下されたり、逃げ惑う人たちがめがけての機銃掃射があったようです。西門付近も同様に逃げまどう人たちに爆弾が落とされたのでしょう、黒い点の密度が濃くなっています。

正門付近には、共済会病院、総務部、会計部などがあり、新城高女の生徒たちはまさに総務部・会計部に配属されており、退避命令が遅れたことも重なり、新城高女動員学徒92名中22名もの尊い命が失われました。他校との比較において「最高率の戦没者」(文献⑤)であった理由と思われます。

なお、工場で亡くなった人たちは戦死したものとされ、遺体は遺族に渡されなかったそうです。遺族に引き取られた遺体も返却を余儀なくさせられ、諏訪や千両の一角に埋められました。遺骨として遺族に渡された白木の箱には、僅かな遺品のみで、何も入っていないことも多かったと言われます。遺体は6年後になって掘り起こされましたが、白骨化しており氏名が判明した遺骨はわずかでした。(文献⑨)



豊川海軍工廠の落日(当時の豊川市役所正面玄関から見た光景)／鈴木榮吉

<空襲の第一波は共済病院、第二波、第三波は・・・>

空襲の第一波は正門前の共済病院に命中したそうです。戦争では赤十字のマークも無意味でした。新城高女戦没者22名のうち、峯貞子さんが最初に被弾したと思われます。彼女は1944年4月に大阪から転居して新城高等女学校四年生として転入してきました。しかし、それは動員学徒として工場で働くことを意味していました。いつか学校に戻って勉学ができることを願いながら……。しかし、体調を崩して盲腸を患い、共済病院に入院していたのです。峯さんの配属先である総務部刷版工場は空襲前に移転したため、同僚はだれも被災しなかったのに、彼女は最期まで入院していたため、真っ先に被害に遭ってしまったのです。峯貞子さんの妹さんの投稿文「父と兄姉を亡くして」(文献⑦)は短文ですがお母様の苦労と悲しみが伝わってきます。

空襲の第二波は総務部、第三波は会計部に命中したという記述があります。しかしそ

こはまさに我が新城高女動員学徒たちの勤務場所だったのです。

総務部労務係に配属された中野千鶴子さんも、体調を崩してしばらく勤務を休んでいましたが、空襲の当日に復帰しました。

中野さんは写真帳に8月7日戦没となっていますが、重傷を負って痛みに耐えながらも翌日の8月8日に息を引き取りました。また、同級生の太田さんによる記述（後出）は痛々しい限りです。享年16歳でした。ただし、戦前の時代は年齢を数え年でかぞえるのが普通でしたので17歳となります。18歳と記されていることがあります但誤りです。（文献⑬⑭）

峯貞子さんと中野千鶴子さんの最期は、『豊川海軍工廠の姫百合』婦人倶楽部秋の増刊号（昭和24年10月）（文献⑤）に詳しく記されています。この雑誌の記者（石原広文氏）は新城高女の犠牲者を中心に12ページほどの記事にまとめました。沖縄の姫百合学徒隊の悲劇を超える大勢の女学生（文献⑨によれば259名）が亡くなったことから「内地版姫百合の塔」ととらえ、その象徴的例として新城高等女学校を取り上げたものと思われます。時代の流れの中に埋もれてしまっていますが、是非多くの人に読んでもらいたいと思います。

中野千鶴子さんの遺品については、ご遺族が南あわじ市の「若人の広場」へ寄贈され、現在は立命館大学国際平和ミュージアムに所蔵されています。彼女は、各所で取り上げられ、遺品が貸し出されて展示されることも度々あるようです。残されたセーラー服は、70年余の歳月を経てもなお、勉強を遮断された彼女の無念さを感じさせます。十年前に豊川の桜ヶ丘ミュージアムでも展示されました。セーラー服とモンペは文献⑩にも掲載されて、「空襲の時に着用していた」と記されています但誤りのようです。中野さんのセーラー服は、茶色く黄ばみ、横が裂け、背中



側には穴が空いているので、銃弾等によって破れ、血に染まったのではないかとも思われますが、同級生たちの証言から、空襲の日作業服だったようです。文献⑤にも「国防色の工員服によれよれのモンペ」という記述があります。



なお、新城高等女学校の憧れの二本線のセーラー服は洒落た贅沢品として1年生の段階で廃止され、途中からは襟の小さい「ヘチマ襟」の制服に変わりました。ただし、夏のセーラー服は遅くまで着用した人もいたようです。そして3年生となって工場へ行くに当たっては、当初は制服でしたが後になって質の劣った作業服が与えられました。しかし、ズボンはすぐにだめになり、最後は作業服の上着とモンペという組み合わせが多かったようです。（写真は中野さんのセーラー服とモンペ；国際平和ミュージアム所蔵）



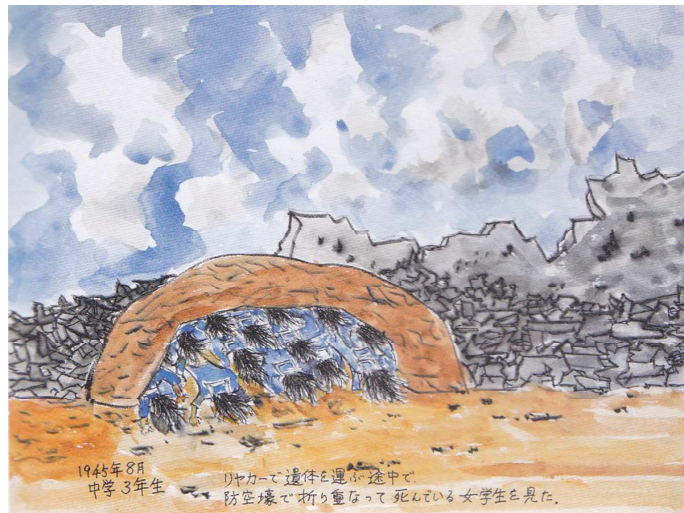
<総務部電気工場の学徒はほぼ全滅>

中野さんをはじめ総務部・会計部に配属された新城高女の戦没学徒たちは防空壕に避難するものの、激しい爆撃に見舞われて生き埋めになったり、防空壕から逃げ出す途中で被爆したものと思われます。総務部電気工場に勤務していた生徒たち9名（名簿順に3名ずつ違う係に配属されたと思われます）は全滅に近い状態で、怪我をしてただ一人生き残った大橋春子さんもすでに逝去され、現時点で彼女たちの最期を知ることはできませんでした。同窓会歴史資料館にある写真帳には、伊藤栄子さん、加藤しげさん、小林みよ子さん、佐々たづ子さん、鈴木信子さん、横内学代さん、渡辺ひでさん、の7名（いずれも総務部配属）の戦没状況には「痕跡を留めず」と記されており、爆弾の直撃を受けたものと思われます。佐々たづ子さんのお母様が残した投稿文「白木の箱に何もなく」（文献⑦）には遺体が見つからなかったことが記されています。また、同じく電気工場に配属された橋本節子さんは写真帳には「壕内圧死」とされていますが、『豊川海軍工場の姫百合』（文献⑤）には工場神社の傍らで絶命

されたような記述があります。彼女は財布の中にご両親の髪の毛を忍ばせ、お守りとして肌深く抱いていたそうです。また古川信子さんは母ひとり子ひとりのご家族で、一人娘を失ったお母様の心痛は果てしなく、病に倒れて後を追うように他界されたと想像される記述があります。

< 4月に転入学して来て8月に戦没・・・ >

横内さんは山梨県の都留高等女学校を卒業してから、1945年4月に新城高等女学校専攻科に転入学してきました。国鉄に勤めていたお父様の転勤に伴って転居し、豊川海軍工廠で勤務することを希望しての入学だったそうです。従って新城高女の校舎で机を並べて級友と一緒に授業を受けたことは一度もありませんでした。でも同じ職場の学友でした。「豊川海軍工廠の絵」作品集(文献⑪)より転載
横内さんと伊東幸子さん北河延子さん



は総務部労務係の住宅班に配属され、同じ防空壕に入ったのですが、壕から逃げ出してすぐに被弾し、軍需工場という戦場で仲間とともに16歳という短い生涯を終えたのです。

中村すみ子さんも総務部労務係住宅班でした。文献④p107に住宅班の松井孟氏による「・・・、中村すみ子の消息がわからない。搜索がはじまるが」という記述を見つけましたがそれ以上はわかりません。写真帳には「壕内圧死」とあるので、横内さんたちと同じ防空壕だった可能性があります。防空壕にとどまっても、逃げ出しても、もはや生き延びる術は絶たれていたということでしょうか、残酷です。

< 会計部配属の生徒たちは・・・ >

会計部機銃工事費係の井澤薫さん、伊藤ふじ子さん、荒川和寿子さんたちは、正門近くの防空壕に避難しましたが、直撃弾を受けて亡くなられたとのこと。諏訪墓地の供養塔と一緒に名前が刻まれている城所一子さんは写真帳に「爆風圧死」とあり、おそらく同様の最期だったのではないのでしょうか。

井澤さんは岡崎高等女学校で学んでいたのですが、豊川海軍工廠に学徒を集結させる

ため、実家が東栄町だったことから、学校からの指示で1945年4月に新城高等女学校の専攻科に入学しました。とても優秀で温厚、模範的な女学生だったとのこと。ご兄弟でも一番勉強ができて、将来は医者になるよう期待されていたそうです（ご遺族談）。でも、総務部の横内さんと同様、新城高女の校舎で授業を受けることなく命を失いました。もっともっと、勉強したかったであろうに・・・。

伊藤ふじ子さんは防空壕から出てすぐに直撃弾を受け、遺体は何も残っておらず、お母様の着物から作ったモンペが唯一の遺品だったそうです。

会計部に配属され、荒川さんたちと一緒に防空壕に逃げ、九死に一生を得た野沢やすさんからの聞き書き（文献⑪）によれば、その防空壕には新城高女の7人が入っており、浅見先生の指示で一斉に逃げ、逃げる途中で爆撃にあって一人だけ助かりました。野沢さんは今でも体の中に爆弾の破片が入り込んでいるそうです。写真帳によれば、井澤さんは頭部爆失、伊藤ふじ子さんは全身爆失となっています。あまりに惨い最期です。

文献④p128に、総務部電気工場山崎一郎氏の手記に次のような記述があります。

「正門近くの防空壕の横を走り去ろうとした時に、爆弾の炸裂する衝撃を受けたので、無意識のうちに近くの壕に飛び込んだが、・・・中の方から「今、入ってきたのは何部だ」と声がしたので「総務部」と答えると声が終わらないうちに「ここは会計部の壕であるから他の部の者は入ってはいけない」というきつい声が返ってきた。・・・飛び出し、姫街道まで突っ走る。・・・、警報が解除されたので大急ぎで工場へ戻る途中、さっき入ろうとして断られた壕はどうかと立ち止まったところ、直撃弾を受けて入っていた何人かの工員諸氏は全て即死又は吹っ飛んでしまっていた。」井澤さんたちが会計部のこの防空壕から出たのかどうかはわかりません・・・。

また、怪我をした人たちも大勢いる筈です。新城高女第32回生で、治療を要する怪我をした方で、記録に残っているのは9名です。最長10ヶ月から1週間までの治療期間と記されています。城倉護子さんの怪我は『豊川海軍工廠の姫百合』に記されています。前出の大橋春子さんは両足完全骨折で6ヶ月、野沢やすさんも一ヶ月となっています。また、9人ほぼ全員に「爆弾弾片創」という傷名が付されています。使用された500ポンド爆弾には殺傷力を増すために爆弾の破片だけでなく、右図のような金属片が入れられており、それによる負傷が多かったと言われます。こんなもの



が体に食い込んできたらと想像するだけでもぞっとします。戦争は無防備な弱者ほど被害が大きくなります。被害者がいるということは加害者もいます。爆弾を落としたアメリカ兵士は女学生が憎かったのでしょうか。アメリカ兵を殺すための武器を生産させられていたという事実は否定できませんが、アメリカ兵もただ命令に従って爆弾を落としただけです。戦争は権力者が引き起こし、犠牲は庶民に降りかかります。これは近代以降世界共通です。このような悲劇が地球上からなくなることを願わずにいられません。

ここでは新城高女22名の戦没者を中心に取り上げましたが、当時は日本全国どこへ行っても大勢の戦没者そしてその御遺族の方々がおみえになりました。誰もが近親者の死に接し、自分の死さえも現実の事として感じながら生活していたことと思います。とは言え、現代で言えば高校2年生の夏、16歳17歳の女子生徒たちが戦争に勝利することを信じて、国のため、家族のため、学業を断念して、一生懸命に軍需工場で働いたのです。でも、豊川における結果は、動員女子学徒が最大の被災者となり、数え切れない不幸をもたらしたのです。

国策を誤ったことは明らかで、繰り返してはなりません。

< 32回生の他にも・・・ >

なお、第29回生の中神たかさんも卒業と同時に挺身隊となって被災したという記述を偶然見つけました。(文献⑦) また、第27回生の山崎達子さんは専攻科(補習科)を卒業した昭和16年の9月に入廠して4年後に爆死されました。山崎さんについては残された日記などがお父様によって『織女の記』(文献⑱)としてまとめられて出版されました。直筆の日記は読みづらいですが、運命の日が近づくにつれて、空襲警報が頻繁に発令されるようになるなど、緊迫した様子が伺えます。また、お父様の短歌は愛する娘を失った悲しみが伝わり、涙を誘います。このほかにも新城高女あるいは新城農蚕学校を卒業して若くして戦死した方々がいるのではないかと思います。



今年は終戦70周年ですが、昨年より集団的自衛権を行使可能とするなど、日本の進路も大きく変えられようとしています。70年続いた平和を永遠に維持するため、高校生諸君の若い力に期待します。

文責 佐藤道洋

4 新城高等女学校が関係する供養塔

＜豊川稲荷＞



豊川稲荷の敷地内に全被災者の名前が彫られた供養塔があります。新城高女の犠牲者22名全員の名前も他の学校の犠牲者と並んで記されています。

毎年8月7日に八七会による盛大な慰霊祭がおこなわれてきましたが、高齢化により2005年で終了したそうです。しかし、有志による慰霊法要は引き続いて毎年行われ、元同僚や遺族などが訪れます。新城高女犠牲者の同級生（第32回生）も毎年集まるそうで、今年は10名が集まりました。

＜諏訪墓地＞



豊川市の諏訪墓地にはいくつかの供養塔があります。その多くが遺体が埋められていた時に建てられたもので、供養塔というより墓石でした。職場単位や学校ごとの有志によって建立されたものですが、新城高女の供養塔はありません。でも、各供養塔に記されている名前を寄せ集めると、22名全員の名前が刻まれていることがわかります。諏訪墓地には個人のお墓を除くと合計で369名、全戦没者の約14%の名前が刻まれているだけですが、新城高女の戦没学徒は全員の名前があります。それは偶然なのでしょうか？ 彼女たちが職場で大切にされ、可愛がられていたことを如実に示しているものと思います。

会計部機銃材料系の供養塔



供養塔の裏側下段に4名並んでいます

伊藤ふじ子、井沢 薫

荒川和寿子、城所一子

総務部の供養塔①



前面に大きく刻まれています

北河延子、中村すみ子

渡辺ひで、横内学代

総務部の供養塔②



右側側面に新城高等女学校の12名が刻まれています

伊東幸子、伊藤栄子、西塚典子、加藤しげ、中野千鶴子、古川信子、

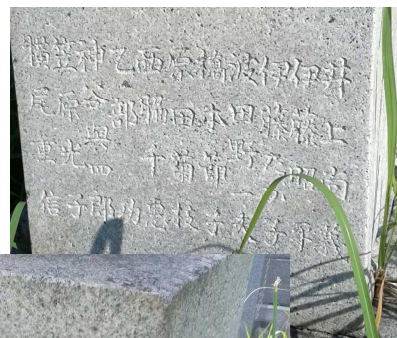
小林みよ子、近藤英子、佐々たづ子、峰 貞子、宮城みちよ、鈴木信子

総務部電気工場の供養塔



左側面に 1 名

橋本節子



右側面に 2 名刻まれています

近藤英子（右から 3 番目）、権田 栄（同 4 番目）

<桃牛寺；新城市的場>



十七回忌（1961年）に際し、新城高等女学校と鳳来寺高等家政女学校（鳳来寺女子農学校に改称）の職員・同級生・同窓会によって桃牛寺に慰霊の観音像が建立されました。そこには新城高女の23名、鳳来寺高女の5名が記されています。新城高女の23番目に杉浦恵美子さんの名前があります。彼女は一学年上の卒業生で、正確には挺身隊であって学徒ではありませんが一緒に供養されています。

鳳来寺高女5名の内、1名は後から付け足されたようですが、理由はわかりません。

鳳来寺高女4名の内2

名（近藤ゆきさん、原田つやさん）は1943年3月、残りの2名（加藤照子さん、原田たつさん）は、1944年3月に卒業し、挺身隊として海軍工廠に参加して被



災しました。１９４５年３月の卒業生たちも女学校の最終学年は海軍工廠に動員され、その多くが卒業後も空襲の日まで先輩達と一緒に工廠に勤務しました。そして一命を取り留めた彼女たちは学業を取り戻すべく、終戦後の９月から希望者は新城高等女学校の専攻科に入学して学び、翌年３月に卒業しました。彼女たちは新城高校の同窓会名簿に載っていませんが、苦難をともにした仲間です。被災した４名が、桃牛寺の観音像の基、新城高女の犠牲者と一緒に祀られている所以と思われます。（文献①、⑥、⑧p311）

また、新城高女第３２回生１１２名は昭和２０年３月２８日に卒業したことになりますが、実際には卒業式はおこなわれず、卒業証書ももらわなかったとのことでした。専攻科においては昭和２０年９月３０日に卒業した方９２名と、翌年３月２５日に卒業した方４３名がお見えになり、戦没した２２名は没後の９月に卒業されたことになっています。１１２名が高女を卒業し、１３５（９２＋４３）名が専攻科を卒業しました。生徒数が多くなっているのは、戦争末期の混乱期、鳳来寺高女や他校から多くが転入学してきたからです。被災された井澤薫さんと横内学代さんもそのなかの二人という訳です。

<新城中学校、新城高女挺身隊出陣之門>



新城高女の敷地や校舎は新城中学校に受け継がれました。正門門柱や作法室などの木造校舎にその面影が残っています。

正門跡脇にひっそりと、新城中学校同窓会・生徒会が中心になって昭和４２年に建立された祈念碑があります。「挺身隊」と記されていますが戦没者のほとんどは「学徒」でした。

5 参考文献等

- ①『新城高等学校創立50周年記念誌』
- ②『新城高等学校創立百周年記念誌』
- ③『新城地方教育百年史』
- ④『嗚呼豊川海軍工廠第11号』
- ⑤『婦人倶楽部 秋の増刊 傑作読み切り小説と話題の実話大特集』その中の「豊川海軍工廠の姫百合」が『嗚呼豊川海軍工廠第13号』に転載されている。ただし、両者はいくつかの点が異なり、正確に転載されていない。特に、工廠長の清水中将の実名が削除されていること、および清水氏が空襲のさなか、乗用車に乗って工廠から逃げ出したという記述が抜け落ちている。ただし、別の文献⑨では、最後まで工廠の防空壕にいたという証言もある。
- ⑥『嗚呼豊川海軍工廠第14号』
- ⑦『本野ヶ原に散りて 旧豊川海軍工廠殉難者遺族の声 三十三回忌を迎えて』
- ⑧『戦争体験文集「意到りて筆随う」恩欠連一宮町支部』
- ⑨『豊川海軍工廠の記録 陸に沈んだ兵器工場』
- ⑩『豊川海軍工廠展 巨大兵器工場 終戦60周年の記録』
- ⑪『「豊川海軍工廠の絵」作品集』
- ⑫『豊川海軍工廠』豊川市桜ヶ丘ミュージアム
- ⑬『フィールドワーク豊川海軍工廠』豊川海軍工廠跡地保存をすすめる会
- ⑭『新城高等女学校卒業台帳』新城高等学校
- ⑮『戦没者写真帳』新城高等学校歴史資料館
- ⑯『ぼくたちわたしたちが生きた証 戦没学徒遺品展』国際平和ミュージアム
- ⑰ 南あわじ市「若人の広場」パンフレット
- ⑱ 野沢やす「爆弾の破片が今も体内に 豊川海軍工廠空襲」安形茂樹氏聞き書き
- ⑲『織女の記』山崎多比良

<おわりに>

新城高等女学校の70年前の悲劇を調べ、お一人お一人の最期を私なりに理解し、ご無念を察しあげてご冥福を祈るとともに、この悲劇をいつまでも風化させることのないよう現在の高校生にも伝え広め、平和の大切さを訴えたいと思い、この調査を進めてきました。しかしながら私の力不足によって十分な調査ができずに今日に至っています。この私のつたない調査結果に何かお気づきの点がありましたらお教え下さるようお願い致します。

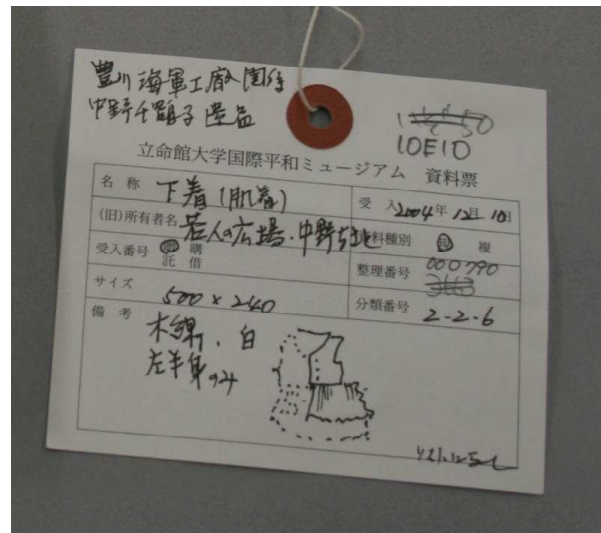
愛知県立新城高等学校 教諭 佐藤道洋

《文化祭以降に明らかになったこと》

①中野千鶴子さんについて

文化祭の当日、戦没者の中野千鶴子さんの妹さんがお見えになりました。今回の企画においては、本校の図書委員の生徒達にいろいろお手伝いをしてもらったのですが、偶然その図書委員の中に千鶴子さんの妹のお孫さんがいたのです。そして前日にお孫さんから千鶴子さんの写真が展示されていることを聞いて来校されたとのことでした。以前からお目にかかりたいと思っていた方なのですが、連絡先がわからず半ばあきらめていたのでびっくりでした。当日お話をさせて頂いた後、改めてお電話等でいろいろと確認をさせて頂きました。ただし、当時は幼かった所以下の内容は多くがご家族の方から伝え聞いたこととなります。

まず、セーラー服は当日着ていたものだと明確におっしゃり、私も間違いないと感じました。背中が裂けているのは、祖母が千鶴子さんの手当をするために、背中側を裂いて脱がせたからだそうです。また、背中中央やや右よりのところに穴が開いているのは水道管か爆弾の破片によるものと思われます。着替えさせてセーラー服などを家へ持ち帰り、洗濯をしたけどあまりきれいにならなかったそうです。また、肌着も左半身しかありませんが、爆弾の破片などで破れただけでなく、脱がすために切り取ったそうです。



千鶴子さんは文献⑤等には国府高校の体育館に收容されると記されていますが、妹さんは花井寺だったとおっしゃいました。千鶴子さんは怪我による苦痛とどのの渴きに耐えながらもしきりに「スイカが食べたい」と言っていたそうです。でも祖母はスイカを食べれば死んでしまうと思い、食べさせませんでした。でも、結局それが千鶴子さんの最後の言葉となりました。今でも夏にお参りするときは必ずスイカをお供えし、みんなで食べるそうです。

千鶴子さんの遺体は諏訪に埋められました。その様子は千鶴子さんの従姉妹で同級生の方が偶然ご覧になっており、どこの穴に埋められたのかを覚えておいたそうです。そして6年後遺体を掘り起こす事になったとき、ご両親はその穴からでてきたお骨を、千

鶴子さんのものとして有り難く受け取られたとのことでした。

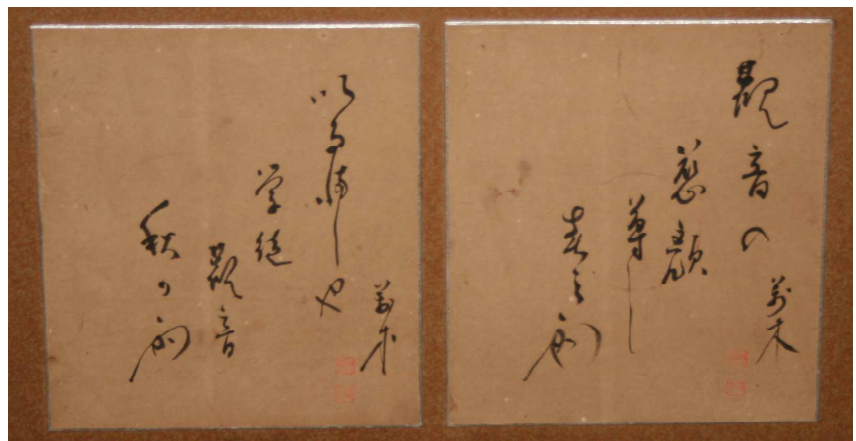
祖母が持ち帰ったセーラー服などはその後お母様がダンスに仕舞われていて、時折ダンスを開けては娘のことを思い出していたようです。そしてご高齢になったあるとき、お母様は千鶴子さんの妹を呼んで遺品を寄贈することを伝え、南あわじ市の「若人の広場」に送られたそうです。いつまでも祀ってくれることを祈りながら・・・。

②桃牛寺 大野伴氏の俳句など

17回忌にあわせて観音像が桃牛寺に建てられたことは本文に記しました。その年に、時の副総理大臣大野伴睦氏が桃牛寺にお見えになり、俳句を残されていきました。その事は文献にも載っていましたので、桃牛寺に石に刻まれた句碑があると思って捜したのですが見当たりませんでした。文化祭当日もその話題があがったので、後日桃牛寺へ行って直接ご住職にお尋ねしたところ、句碑ではなく直筆の色紙がお寺の中に飾られているということでした（右写真）。50年以上の年月を経ているので、やや黄ばんでいました

たが立派な額に納められて飾られています。

以前はその文字を銅板に移植し、白い漆喰にはめて境内に飾っていたそうですが、改修の際に取り外したそうです。



俳句は

「いたましや 学徒観音 秋の雨」 と 「観音の 慈顔尊し 春の雨」

と読めるようです。空襲や終戦の記憶がまだ冷めない時期に、副総理大臣が新城高女の戦没学徒等を思い遣って句を詠まれたという史実も忘れないでおきたいと思います。

また、彼女たち23人の名前が記されたひととき大きな位牌は、正面の祭壇左上に鎮座していました。一方、4名が記された鳳来寺家政高等女学校の位牌は右上のところに置かれています。その位置は何十年も変わっていないとのことでした。

なお、8月7日の命日は桃牛寺のお施餓鬼の日でもあるため、今でも毎年お施餓鬼のお参りの際には、ご位牌をお施餓鬼用の祭壇に移し、全員のお名前を読み上げてご供養されているとのことでした。